

靴の歴史散歩 ⑦9

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

篠田鑛造の『明治百話』に、誠実な経営者として特筆された靴鞆製造問屋、内田商店の内田直二（1854-1946）は、明治から大正期にかけて、商品カタログを有料発行し、南は台湾から北は樺太まで、営業を拡大させた靴の通信販売の創始者である。

その事績・功績は、『靴産業百年史』（日本靴連盟編）の〈靴業界の向上につくした人びと〉という欄に、二代目内田^{ふとみ}二十三と共に掲載されているから、ぜひご覧いただきたい。

地方に有力な店も少なかった時代、靴小売店が遠隔地の顧客を居ながらにして獲得できる通信販売はまことに魅力的で、その商法はまたたく間に業界内にも波及していった。以後は各店がカタログの意匠を凝らしたので、当時の人々の間でもカタログは大事にされたようで、今でも時折、古書市などでこれらのカタログとの出会いがあるから嬉しいし、だから目が離せない。

さて、これまでに収集した資料の中に、幸いにも内田直二商店の商品カタログ『靴鞆定価表・第九版』（25cm×18.5cm、28ページ、明治40年頃発行と推定）もあるので、これを機にご披露したい。

このカタログについては、以前から所在地の件で難問を抱えたままなので、少々の前説をお許しいただきたい。

内田直二商店の所在地については、『明治百話』によれば「…桜田本郷町の南角にある靴店内田。…」とあり、『靴産業百年史』では「内田直二（内田商店・

芝区桜田本郷町は、…」とあって、いずれも桜田本郷町となっている。

それに対し、手元にある『靴鞆定価表』には芝区桜田伏見町二番地（現、港区新橋2-1-3）とあって、まったく住所表記が異なるから落ち着かないのである。

ちょうど助け舟のように、定価表の裏表紙に「内田靴鞆製造問屋位置」という地図が載っているので、問題解明に役立つかと思ひ、掲載したのでご覧いただきたい。

この地図で桜田本郷町を見てみると、同じ交差点の内田商店真向かいの地に当たる。篠田鑛造が明治百話を書いた時分は、本郷町の交差点とでも呼んでいたのであろうか。そして、百年史の編者佐藤栄孝は、何を根拠に本郷町としたのか。興味津津で次号へ続けたい。

